

第15章 アメリカ革命

第1節 独立戦争

あるアメリカの歴史家が、学生時代の面白い経験話を話してくれたことがあった。学生時代に歴史の先生がアメリカ革命（独立戦争）の原因を1つだけ挙げるようにと言ったことがあったそうである。1つだけと言われて学生たちは困ってしまった。原因はいくつも考えられたからである。先生が挙げた答えはこうであった。「アメリカの植民地がイギリス本国から3000マイルも離れていたからである」。アメリカの植民地とイギリス本国との距離を知っているのは専門家だけで、私もアメリカ史の専門家ではない。私の専門は革命論であり、この答えに対しては「説明としては正しいかもしれないが、それなら独立戦争は革命とは呼べなくなってしまう」としか言いようがない。誕生と再生は別物である。遙か彼方にある植民地が独立しても、それで植民地に革命が起きる訳ではない。新生児の臍の緒を切ってみせたところで、それは革命とは呼べないからである。

果たしてアメリカ革命は革命の名に値するのであろうか。そこで実現された変革は、生活様式を永久に変える様なものであったのだろうか。幸いなことに、おなじ様な問いかけはアメリカの歴史家も繰り返し行なってきた。我々は彼らの言い分に耳を傾けるだけで十分である。私が引用できる史料は限られているが、アメリカ革命が革命の名に値するか否かという問いに対する答えは用意できている。以下で、なぜアメリカ革命が革命として重要であったかを示してみようと思う。

「アメリカの独立戦争を革命と呼ぶのは簡単だが、そのおかげで誤解や混乱が生じている。ジョン・アダムズは手紙の中で、伝聞で得た知識を根拠に不正確なことを口にする頑固な世代を繰り返し非難している。1815年にこう書いていた。『アメリカ合衆国が行なった最初の戦争の歴史と、アメリカ革命の歴史は同じでない。…革命は戦争が始まる前にすでに始まっていたのである。すでにアメリカ人の心の中で始まっていたのである』」(1)。

ところが当の本人は1821年に、つぎのように書いていた。「革命の前からアメリカにはイギリスからの独立を願う気持ちが満ち満ちていたと言うが、それは間違っている（天頂 *zenith* と天底 *nadir* ほどに違っている）…私はといえば、革命前の状態に戻れるなら何でも犠牲にする用意があった。安全を保障されることが唯一の願いであった。私は革命が私自身や私の家族に破滅な事態を齎すことを恐れていた。そして事実、革命は破滅な事態を齎すことになった」。

さて、どちらの言い分が正しいのだろうか。歴史においては、ときにお互いに矛盾する事実が登場して来ることがある。つまり、両者の言い分をともに真剣に受け止める必要があるということである。

1750-75年には2つの革命が起きていた。フランス革命とイギリス「革命」である(2)。イギリスでは、1688年の名誉「革命」で革命以前の伝統が復活してくるようになった。こんな例を挙げることができる。エドワード・ランドルフ *Edward Randolph* の叔父ジョン・ランドルフ（ジョージ・ワシントンの友人であった）がジョージ・ワシントンの手紙を捏造したものだが、つぎのような内容であった。「革命の原則を大切にす券囲気の中で育ったおかげで、間違いなく立派な人たちの足跡を自分も辿ると確信していました。なんと素晴らしいことでしょう。しかし、我々に反対している勢力も同じ原則を大切にしているはずです。つまり我々の不幸と間違いのもと、我々に反対している勢力が大切にしていると言っている原則を実行に移してしまったことだったのです」。

バレット・ウェンデル *Barrett Wendell* は、アメリカ革命の指導者たちの保守的な考え方をつぎのように説明している。「長い歴史の流れの中で考えれば、我々が主張していることもイギリスのコモンロ

一という人権保障の制度から当然のごとく登場して来たものなのである。…我々は誰かに、またどこかの国に新しい制度を押し付けようとしているのではない。イギリス軍と戦っている我々が目指しているのは、イギリスのコモンローが保障し、イギリスの国王ですら手を触れることができないとされている権利を守ることである。我々の革命が他の革命と違っているのはこの点である。我々は新しいことを始めようとしているのではなく、古い制度を守ろうとしているのである。新しい法制度・統治制度を創ろうというのではなくて、我々の先祖が長い経験の中で信頼できることを証明してきた法制度・統治制度を守り育てようとしているのである。…アメリカ人がやろうとしていることは間違っていない。アメリカ人は何か抽象的な原則のために戦っているのではなく、^{みずか}自らの既得権を守るために戦っているのである。…さしあたり今は反逆者ということにされているが、危機に^お於いて既存の制度を守る側に立つべき優れた選良たちといま敵対せざるを得ないのは、やむを得ない不幸と考えている。ジョージ王戦争（オーストリア継承戦争）で活躍したウィリアム・ペッパーレル William Pepperrell の旧邸宅（メイン州にあり、連邦政府によって歴史遺跡に指定されている）が象徴するように（独立戦争のとき王党派であった孫がイギリスに逃亡して、邸宅は州政府に没収される）、我々は忘れがちだが、アメリカの独立は多くのよきアメリカ人を失い、やむを得なかったとはいえ高い代価を支払うことにもなったのである」(3)。

1688年のイギリスの名誉革命と1776年のアメリカの独立宣言のあいだに密接な関係があることは、ブラックストン William Blackstone が自身の『英法積義 Commentaries on the Laws of England』のアメリカ版によせた1689年の議会に関する脚注からも^{うかが}伺える。「独立宣言を注意深く読めば、あきらかに独立宣言の起草者は1689年の『権利宣言 Declaration of Rights』を念頭に置いており、『権利宣言』に従うことを意図していたことが判る」。

既得権擁護のためということが90%、反乱者の汚名を敢えて受け入れるということが10%、こうしてアメリカ史上、最も悲劇的な出来事（南北戦争で最大の犠牲者を出したアンティタムの戦い the Battle of Antietam? : 訳者）があった1862年に、独立戦争の意味が再確認されることになったのである。

「1776年のアメリカ革命を見てみよう。…アメリカ革命を革命だとするなら、南部連合の連邦離脱（1861年）は革命でも何でもなし。南部連合の連邦離脱でアメリカ社会のあり方が変わった^{わけ}でもないし、統治機構が崩壊したわけでもない。ただ統治機構の一部が分離したに過ぎないだけである。独立戦争を一緒に戦った仲間が政策を^{こと}異にし、風潮を^{こと}異にするがゆえに分離しただけなのである。植民地が新たに併合された^{わけ}でもなかったし、イギリスの役人たちが大挙してアメリカから出ていった^{わけ}でもなかった」(4)。

アメリカの独立戦争で実現した「革命」は、フランス革命以上に抽象的な意味を持っていた。アメリカにいたフランス政府のスパイも、またフランス本国にいた大臣たちも「帝国の革命 les révolutions des empires」(5)には無関心で居れなかったはずである。そして1776年、どのアメリカ人政治家よりもフランス哲学に詳しかったモリス Gouverneur Morris は、つぎのように母親あての手紙に書いていた。

「いま戦われている戦争の結果がどうなるかは誰にも判らない。革命に不幸な出来事は付き物だが、最悪なのはアメリカのために自らを犠牲にすることである。しかし人類普遍の権利を守るためなら、征服者たるイギリス人よりも幸せではあります」(モリスはイギリス人でありながらアメリカの独立を支持し、そのために貢献もしていた: 訳者)。

ドニオル Henri Doniol やタイン Claude Van Tyne が書いた独立戦争に関する本からも、すでに1760年代にフランスの外務大臣ショワズール Etienne-François de Choiseul や独立宣言の起草場面（2ドル札の裏面を参照）を版画にしたデュランド Asher Brown Durand たちは、アメリカ革命の勃発を予測していたそうである。仏領西インド諸島では、「アメリカの独立のために！」が乾杯に際しての挨拶言葉

であった(6)。もっとも、レイナル Guillaume Thomas François Raynal は 1770 年に「イギリス革命 English Revolutions」(複数形であることに注意。ピューリタン革命と名誉革命を指す? : 訳者)について書いていたし(7)、デュランドもショワズールにつきのようなことを書いていた。「想像力を欠くイギリス人は、いつか植民地アメリカが独立する日が来ることを認めようとしなが、私が望むのはアメリカが独立する形で実現する革命である。…もしニューヨークにクロムエルのような人物がいたら、イギリスで実現しなかった共和国をアメリカで簡単に実現できていたはずである。…そんな人物を登場させることができるのは、フランスとスペインだけである」。

当時、指導的な立場にあった人物は、すでに 1769 年にフランスから支援が来ることを期待していた。「ポントロロワ Nicolas Sarrebource de Pontleroy (仏領カナダで対英要塞建設に携わっていた技術将校) は、独立戦争でアメリカ植民地の住民の待遇を改善しようとするイギリスの努力が水泡に帰すだろうと信じていた」。

当時フランスの政治家たちがアメリカ革命について書いたものには、「名誉革命」への言及を匂わせる様な記述はまるで見当たらない。アメリカ革命は数多くある革命の 1 つに過ぎず、フランス人はその中身については無関心であった。早い時期にアメリカを訪れていたあるフランス人は、アメリカの独立と新政府の形について論じていたそうである。

「デュ=シミチエール Du Simitière と名乗るフランス出身の画家がいるが、この人物は大変な詮索好きで、アメリカ革命の歴史を書くべく資料の収集をしている。まずイギリスからアメリカに紅茶を運んできた船に関する記事などを新聞から切り取り、さらに断片的な情報や将来への憶測をすべて集めていた。…アメリカの独立に関する一連の憶測と将来の新政府に関する憶測である」(8)。

2種類の憶測をリストにして見せたところは見事と言うしかない。1つは「代表なくして課税なし」というイギリス人の統治原理である。それがアメリカ人には認められず、だからこそ彼らは独立を考えたのである。もう1つは新しい政府のあり方を巡る問題であった。ホイッグ的な原理(「代表なくして課税なし」)に立ち返ることで独立を目指したことは、アメリカ革命の一面に過ぎない。

第2節 「平等」の意味

アメリカ人はイギリス人と同じ権利が認められることを望んでいたのである。フランス人が 1789 年に要求していた「平等 égalité」はフランス人同士の「平等」であって、職業の違いに関わりなく全てのフランス人は「平等」であるべきだという意味であった。しかし、1776 年にアメリカ人が要求していた「平等 equality」は、植民地の「統治のあり方 body politic」を本国イギリスの「統治のあり方」と同じにして欲しいという意味であった。マサチューセッツの植民地は自分たちのことを「マサチューセッツ州 the Commonwealth of Massachusetts」と呼んでいたが(ほかにケンタッキー州、ペンシルベニア州、バージニア州も State を使わないが、その理由は不明: 訳者)、「合衆国 United States」が「連合王国 the United Kingdom」を想起させるようなものである。ジョージ・ワシントンは立派な「イギリス紳士 English gentleman」ということになっていたし、アメリカの公文書は見事な「イギリス議会で使われていた英語 parliamentary English」で書かれていた。アメリカ革命も格別に新しいことではなく、ただ新世界でイギリス流のやり方を最初に採用した先駆者に「平等な equal」権利を認めるべきだと主張していたに過ぎなかった。

独立当初、アメリカ人がイギリスに対して抱いていた劣等感の証拠は他にもある。ヨーロッパの圧倒

的な影響力に代えて新興国にも諸王国と「平等な」立場を認めるべきだとか、『独立宣言』の序文にあるように「列強諸国とおなじ地位 an equal station among the Powers of the Earth」を認めるべきだとアメリカは要求していたのである。1776年に『独立宣言』でアメリカが要求していた「平等」は、いまでもアングロサクソン系の国々の間で大切にされている。ところが1789年の『人権宣言 Déclaration des droits de l'homme et du citoyen』で要求されていた「平等」は、個々の人間が当然のこととして持つ権利であった。2つの『宣言』の違いは、奴隷制に対する態度の違いからくる。1776年の段階では、だれもジョージア州や南カロライナ州の「有力者たち gentlemen」に奴隷制の廃止を強制することなど考えていなかったのである。それにアメリカ以外の植民地にも奴隷制は存在していた。しかし『人権宣言』が念頭に置いていたのは奴隷制ではなかったのである。もちろん、奴隷制と全く無縁だということではない。

1776年の『独立宣言』に登場して来る「平等」は、植民地がイギリス本国と「平等」であるということの意味していた。それに対して1788年の『合衆国憲法』に登場して来る「平等」は、全ての人間が「平等」であるという信念の表明であった。革命に於いては、そこで使用される言葉の意味が十分に理解されることなく、その言葉が如何なる希望、如何なる恐怖を国民の間に呼び起こすかも十分に理解されないまま使用されるものである。その言葉に隣人が示す反応、敵や使用人が示す反応から判ることは、革命の将来を見通すのが如何に困難かということである。革命で新しく使われるようになる言葉は、まるで暗闇の中で新しい土地に撒かれる種のようなものである。その言葉に対する答えは外の世界からやって来た。アメリカの友人であったフランス人や「自由主義者 free-thinkers」、黒人が持っていた「非イギリス的世界 non-Whiggist world」では、「平等」は言葉の意味を変えてしまうほどの強い反応があった。「平等」は奴隷や移民、ネイティブのアメリカ人（インディアン）にとって希望の言葉となった。1776年の段階では、だれも彼らのことを念頭に置いていなかったからである。

1784年にジェファソンが起草した『領土法 Land Ordinance』は、2つの「平等」が妥協によって実現した最初の例である。1787年の『西北部領土法 Northwest Ordinance』の成立以前に実現した見事なバランス感覚の成果であった。アメリカ政府は新しく「領地 territories」を獲得することになり（イギリスに代わって旧イギリス領の統治を担当する政府が必要であった）、その結果、アメリカはイギリスと対等な立場を手にする事ができたのである。七年戦争を終わらせた1763年のパリ条約でフランスは北米の領土を放棄し、イギリスに代わってアメリカがその入植と開拓を担当することになった。このように、アメリカ革命は英仏戦争の結果、実現したのである。植民地アメリカは母国イギリスと対等な地位を獲得して、将来における発展の可能性を手に入れたのである。こうしてアメリカは、北米大陸に対して責任を負うことになった。

『領土法』によれば、アメリカが新しく獲得した「領地」、あるいは新しく獲得する「領地」は名前を与えられて「州 State」となり、しかるべき時に新しく州政府を構成して独立13州の3分の2以上の同意を得て「連合規約 Articles of Confederation」が認める「国家連合 Confederation of States」に参加することが可能になった。こうして「西部 the West」も「the East 東部」と対等の地位を保証されることになったのである。新しく獲得した「領地」にも「独立13州と同じ地位 equal footing with the original States」が認められることになった。

しかし『領土法』では実現できなかったことがあった。「平等 Equality」が「信念の言葉 a word of faith」に留まらず、「希望の言葉 a word of hope」になるはずであった。ジェファソンは『領土法』に、つぎのような文言を挿入するつもりでいたのである。「1800年以降、新しく州となる領土においては、奴隷制も意思に反した強制労働もあってはならない」。この文言こそが「平等の信念 faith in equality」

と「平等の希望 hope of equality」の間を取り持つ「初めて発せられた愛の言葉 the first word of love」になるはずであった。しかし、「連合会議 Congress of Confederation」にニュージャージー州の代表が1人欠席していたために州として議決権を行使できず、この文言は採択されなかった。13州のうち6州はこの文言の採択に賛成したが、7州が反対であった。

この文言が採択されたのは3年後の1787年（フランス革命の2年前）、『北西部領土法』に於いてであった。ただし奴隷制が禁止されたのはオハイオ川の北西側にある地域だけであって、オハイオ川の南側については禁止が明言されなかった。しかしマサチューセッツ州の代表デイン Nathan Daneのおかげで、「当該の領土においては奴隷制も意思に反した強制労働もあってはならない」とされることになった。その結果、アメリカは奴隷制を認める州と認めない州に分断されることになった。各州の権利は「平等」になったが、個人の「平等」は北半分でしか認められないことになったのである。

この問題を再提起したのが、独立戦争を戦った世代の孫たちであった。1860年のことである。

第3節 アメリカ革命とヨーロッパ

第4節 「不完全な革命 half-revolution」

第5節 ヨーロッパの戦争とアメリカ

第6節 新世界

第7節 アメリカ人の「約束 promise」と自然法

第8節 「法として適切であるか否か due process of law」